

(3) 三王山遺跡 第14次調査 (2013109)

所在地 新潟市江南区所島一丁目760番17

調査の原因 個人住宅建設 (民間事業)

調査期間 平成25年5月17日 (1日間)

調査面積 12.3㎡ (調査対象面積216.64㎡)

調査担当 朝岡政康

処置 工事立会

調査に至る経緯 遺跡は昭和48 (1973) 年の発見以降、確認調査や本発掘調査が複数回行われるなど調査履歴は多い。個人住宅建設計画に伴い、埋蔵文化財の取扱いを決めるために着手報告を提出し (平成25年5月13日付新歴B第24号の2)、確認調査を実施した。調査の結果、遺跡の広がりの確認され『文化財保護法』第93条の届出 (平成25年9月30日付) が提出された。

位置と環境 遺跡は、新砂丘Iに比定される亀田砂丘及びその縁辺の自然堤防上に立地する。標高は現地表面で約2.7mを測り、同じ砂丘上やその周辺には平安時代の遺跡が多く点在する。これまでの調査成果によって、古代～中世にかけて断続的に人々の生活が営まれていたことが分かっている [朝岡2010]。

検出遺構 2か所のトレンチを設定した。I層：盛土層、II層：オリーブ褐色シルト、III層：灰色シルト、IV層：ぶい黄色シルトに分層される。III層が遺物包含層、IV層が平安時代の遺構確認面である。現地表面下約65cmでIII層、約75cmでIV層上面が検出される。1Tで溝状遺構1条・浅い土坑1基・ピット2基が、2Tでは溝状遺構1条・土坑2基・ピット1基が検出されるなど遺構密度は高い。遺構の状況を確認後さらに砂丘層 (VIII層) まで約1.8m掘り下げたが、遺構・遺物ともに確認できなかった。

出土遺物 コンテナケース半分ほどの遺物が出土した。図化した5点を含め全て平安時代の所産と考えるが、小破片であり3以外の詳細な時期は不明瞭である。1は土師器無台碗、2は須恵器無台杯、3は9世紀前半の須恵器有台杯、4・5は同一個体で須恵器大甕の体部破片である。2～5は、胎土から笹神丘陵などの阿賀北産と思われる。

まとめ 今回の調査では、古代とともに主体となる中世の遺物は認められなかった。しかし、調査地まで確実に遺跡が広がっている事を確認した。取扱いは、調査後の設計により施工が遺跡に与える影響を軽微にできたため工事立会とした。

(龍田優子)

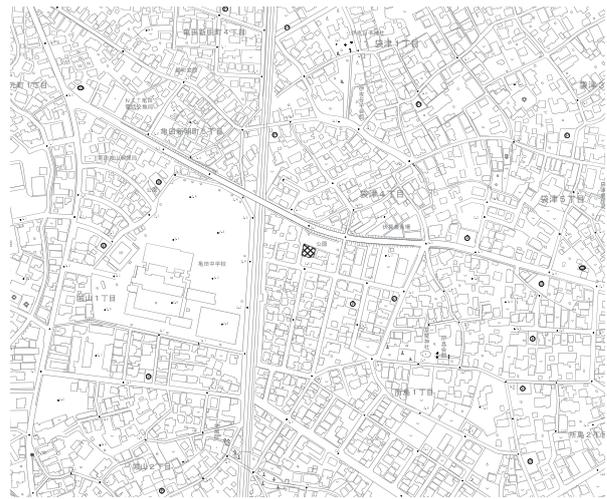


図1 調査位置図 (1/10,000)

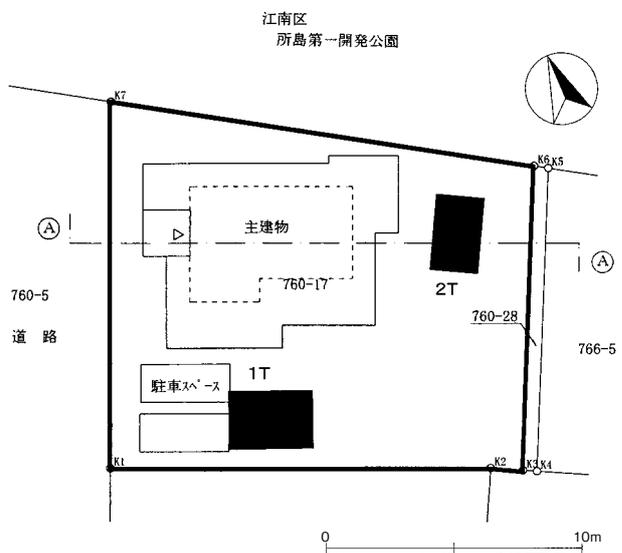


図2 トレンチ位置図 (1/300)

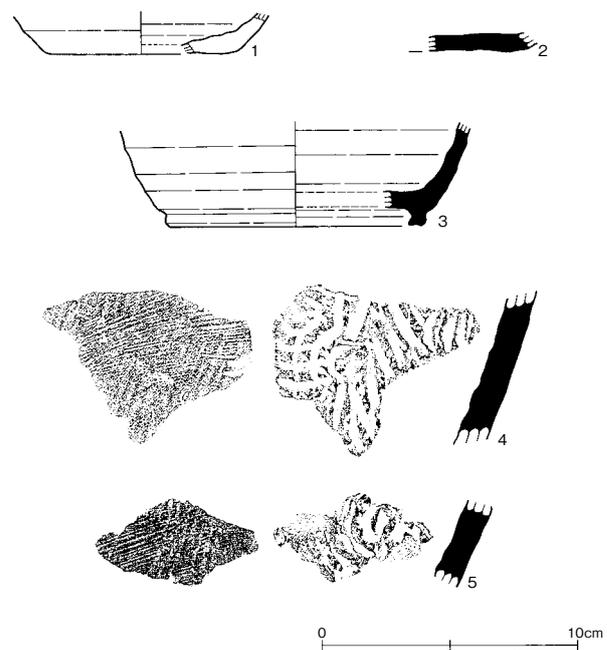


図4 遺物実測図 (1/3)

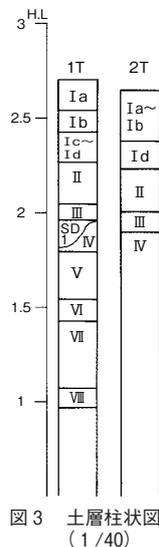


図3 土層柱状図 (1/40)

(4) 新道遺跡 第1次調査 (2013111)

所在地 新潟市西蒲区巻字新道甲4121番1外

調査の原因 葬祭場建設 (民間事業)

調査期間 平成25年5月22・23日 (2日間)

調査面積 75.0㎡ (調査対象面積1649.61㎡)

調査担当 諫山えりか

処置 工事立会

調査に至る経緯 葬祭場建設に伴い、埋蔵文化財の有無を確認するため、着手報告を提出し (平成25年5月20日付)、試掘調査 (2013111) を実施した。その結果、新たに遺跡が所在することが判明したため、『文化財保護法』第93条の届出を提出した (平成25年5月27日付)。

位置と環境 西川右岸の現標高約3.4mの沖積地内、自然堤防上に位置する。周辺は調査歴が少なく、遺跡は希薄である。

基本層序はⅠ～Ⅷ層に分かれる。Ⅰ層：盛土、Ⅱ・Ⅲ層：灰色シルト質粘土、Ⅳ層：暗褐色シルト質粘土、Ⅴ層：褐灰色シルト質粘土である。Ⅴ層が遺物包含層で、3Tでのみ確認された。また遺物は出土していないが、3TⅦ層：褐灰色シルト質粘土で炭が定量認められ、Ⅵ層より下層にも遺物包含層や遺構確認面等が存在する可能性もある。土層の特徴から、周辺は低湿な環境にあったと推測される。

検出遺構 遺構は検出されなかったが、土器が集中して出土していることから、遺構の存在が推測される。

出土遺物 土師器・須恵器がコンテナケースで1箱出土した。いずれも3TのⅤ層出土遺物である。このうち遺存率の高い遺物を中心に計16点実測図を掲載した (図3)。なお、須恵器は1点出土しているが、細片のため掲載しなかった。

1は土師器高杯の杯部と推測する。内面黒色土器である。復元口径は17.1cm。口縁部外面には沈線状に2条の凹みが巡る。内外面ともヘラミガキが認められる。2は土師器鉢で口径9.8cm、器高5.0cm。内外面とも粗いハケメで、ハケメの条間はやや広い。3は小形の壺と推測され、口縁端部を欠損する。内外面ともヘラミガキが認められる。4は底部を欠損するが、形態から甌と推測する。口径16.7cm。頸部外面は口縁部のヨコナデにより段状を呈する。体部外面上半及び体部内面は条間が広めの粗いハケメで、体部外面下半はヘラケズリも確認される。器壁は約1.0cmと比較的厚い。5～15は甕と考える。いずれもハケメが確認できる。6のように体部が張らないものと、7のようにやや体部が張るものがある。13は底部で外方へ突出する特徴をもつ。東北地方の影響を受けた可能性がある。14・15は平底の底部で、器壁は

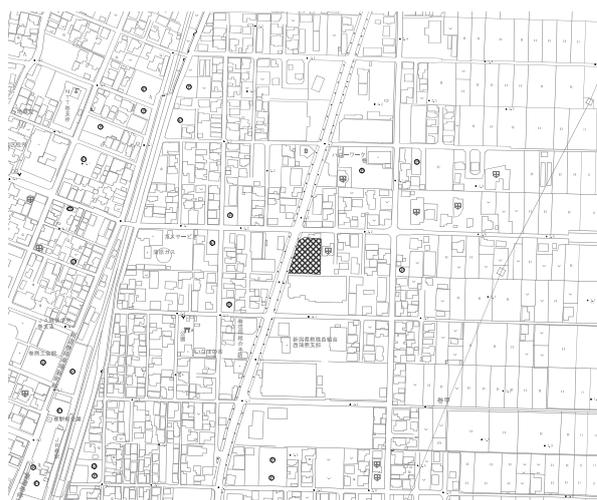


図1 調査位置図 (1/10,000)

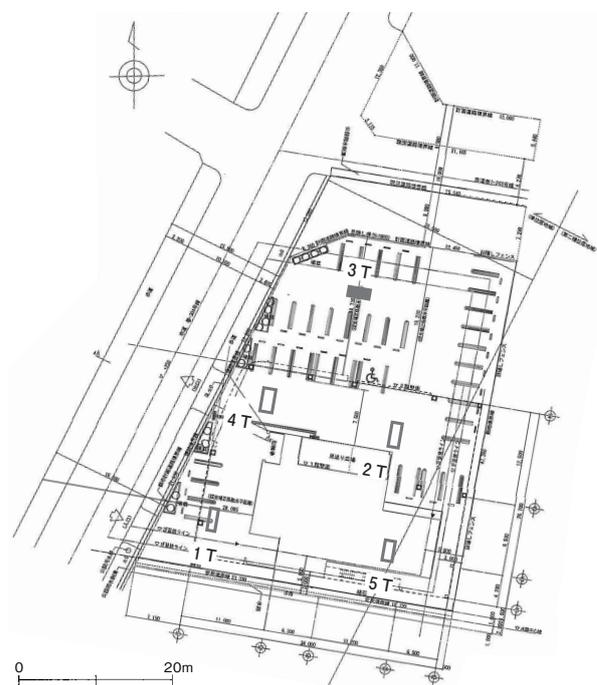


図2 トレンチ位置図 (1/1,000)



3T南壁土層断面 (北から)

厚い。体部が張らない形態と考えられる。16は形態・調整等から円筒形土製品と考えられる。外面はハケメ、内

面は指頭圧痕のちハケメで、粘土紐接合痕も確認される。

まとめ 今回の調査結果を受け、新道遺跡（新潟市遺跡番号756番）として新たに周知化された。

取扱いについては、建物基礎部分の掘削において工事立会を実施した。

遺物の年代は、形態や法量、調整技法などから、春日編年〔春日1999など〕Ⅲ期（8世紀前半）を中心とした

時期と考える。今回の調査で微高地上に遺跡の存在することが確認されたことから、当地域周辺で今後新たに遺跡が発見される可能性も考えられる。市内で資料数が少ない時期でもあり、当該期の社会の動向を探るうえで重要な資料といえる。なお、出土遺物については（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団春日真実氏・（株）吉田建設笹澤正史氏からご教示頂いた。（相田泰臣）

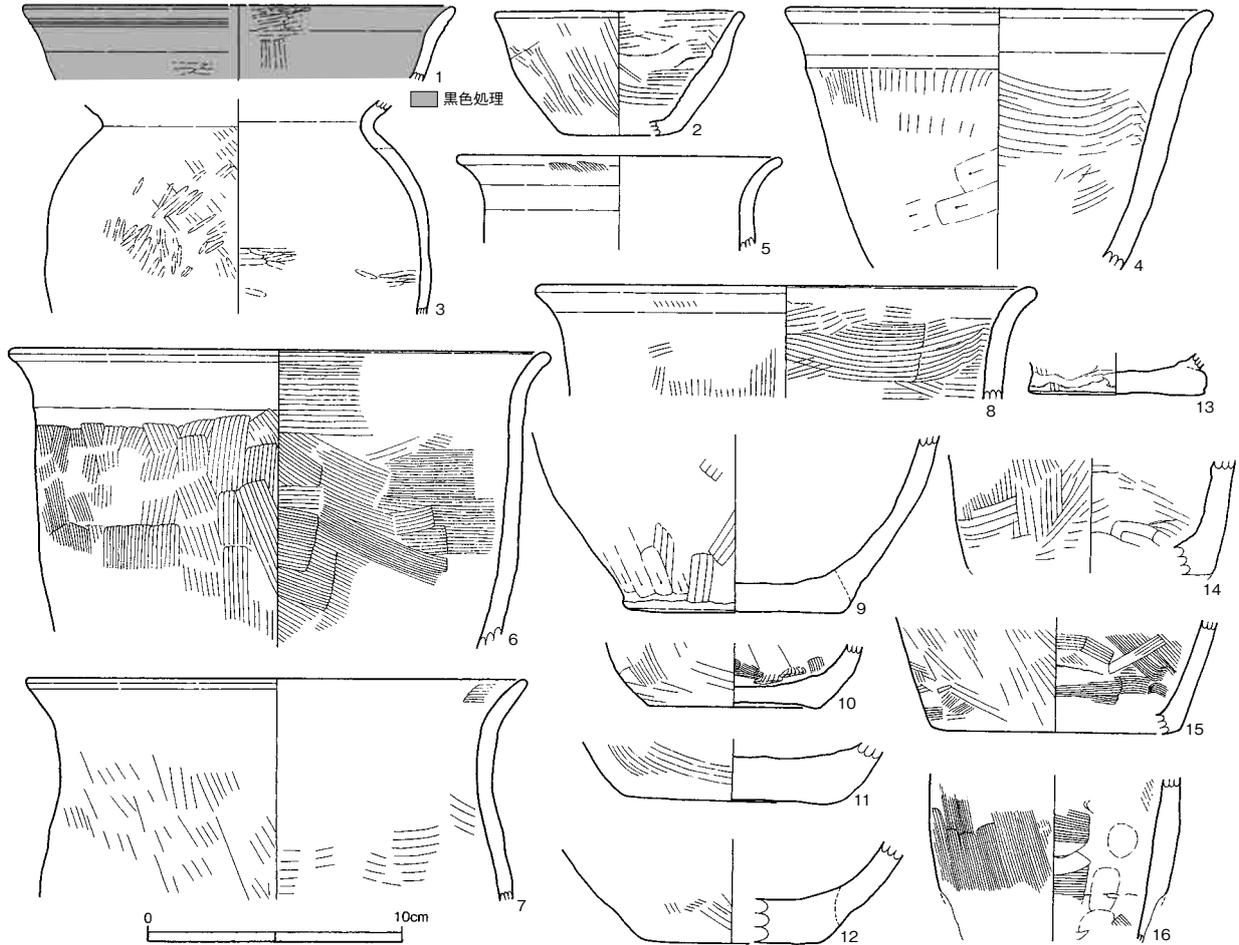


図3 遺物実測図（1/3）

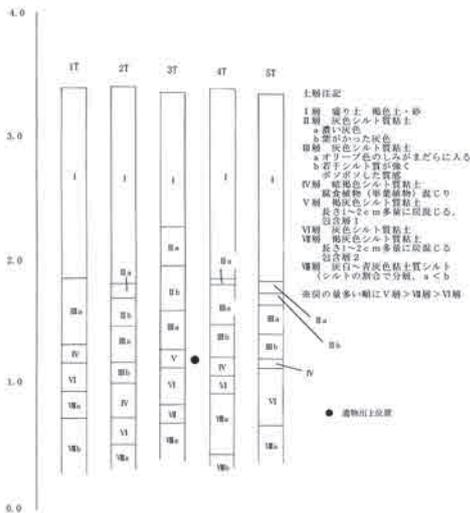


図4 土層柱状図（1/60）

表1 実測図掲載遺物一覧

掲載番号	出土位置	種別	器種	調整	
				外面	内面
1	3T V層	内面黒色土器	高杯	ヘラミガキ	ヘラミガキ
2	3T V層	土師器	鉢	ハケメ	ハケメ
3	3T V層	土師器	壺	ヘラミガキ	ヘラミガキ
4	3T V層	土師器	甕	ハケメ・ヘラケズリ	ハケメ
5	3T V層	土師器	甕	ハケメ	
6	3T V層	土師器	甕	ハケメ	ハケメ
7	3T V層	土師器	甕	ハケメ	ハケメ
8	3T V層	土師器	甕	ハケメ	ハケメ
9	3T V層	土師器	甕	ハケメ・ヘラケズリ	
10	3T V層	土師器	甕	ハケメ	ハケメ
11	3T V層	土師器	甕	ハケメ	
12	3T V層	土師器	甕	ハケメ	
13	3T V層	土師器	甕	ハケメ	
14	3T V層	土師器	甕	ハケメ	ハケメ
15	3T V層	土師器	甕	ハケメ	ハケメ
16	3T V層	円筒形土製品		ハケメ	ハケメ・指頭圧痕

(5) 山木戸居付遺跡 第1次調査 (2013113)

所在地 新潟市東区山木戸四丁目376番地1外

調査の原因 長屋建設 (民間事業)

調査期間 平成25年6月5・6日 (2日間)

調査面積 約27㎡ (調査対象面積1,461.39㎡)

調査担当 諫山えりか

処置 工事立会

調査に至る経緯 長屋建設に伴い東区役所建設課から『都市計画法』第32条に基づく意見照会があった (平成25年3月28日付)。埋蔵文化財の有無を調べるため着手報告を提出し (平成25年5月31日付)、試掘調査を行った。その結果、埋蔵文化財が確認されたことから新発見遺跡として周知化した。そのことを受け、『文化財保護法』第93条の届出が提出された (平成25年8月30日付)。

位置と環境 調査地は、阿賀野川右岸の新砂丘Ⅱ-4である牡丹山砂丘に立地する。現地標高は約0.6mを測り、約200m東には古代・中世の集落跡である山木戸遺跡が位置している。周辺は、開発により宅地化が進み畑地がまばらに残る程度である。

検出遺構 4か所のトレンチを設定した。基本層序はⅠ層：盛砂・暗褐色砂、Ⅱ層：暗褐色砂、Ⅲ層褐色砂 (暗褐色砂がまだらに混じる)、Ⅳ層：黄褐色砂に分かれる。Ⅰ層が表土、Ⅱ・Ⅲ層が遺物包含層、Ⅳ層が遺構確認面と考えられるが、今回の調査で遺構は検出されなかった。現地表面から0.2~0.4mの深さで包含層上面が検出される。

出土遺物 1~3Tから弥生土器・須恵器・珠洲焼・近世陶磁器が出土し、6点を図化した (図3)。1は外面が赤彩された弥生土器である。横位沈線より上部は縄文が施文され、壺と推測される。2は須恵器無台杯、3~6は珠洲焼片である。3は壺、5はすり鉢とともに吉岡編年のⅢ期 [吉岡1994] と思われる。4は甕で6は土器片円板である。

まとめ 本遺跡は新発見遺跡であり、小字名から山木戸居付遺跡とした。出土遺物からは、弥生時代から断続的に中近世まで営まれた遺跡と推測される。取扱いは、協議の結果、工事の掘削幅が1.0m以下となったため工事立会とした。 (龍田優子)



1T北壁土層断面 (南から)

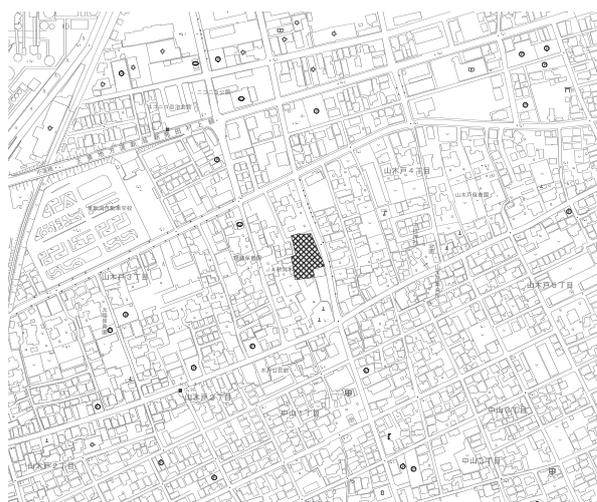


図1 調査位置図 (1/10,000)

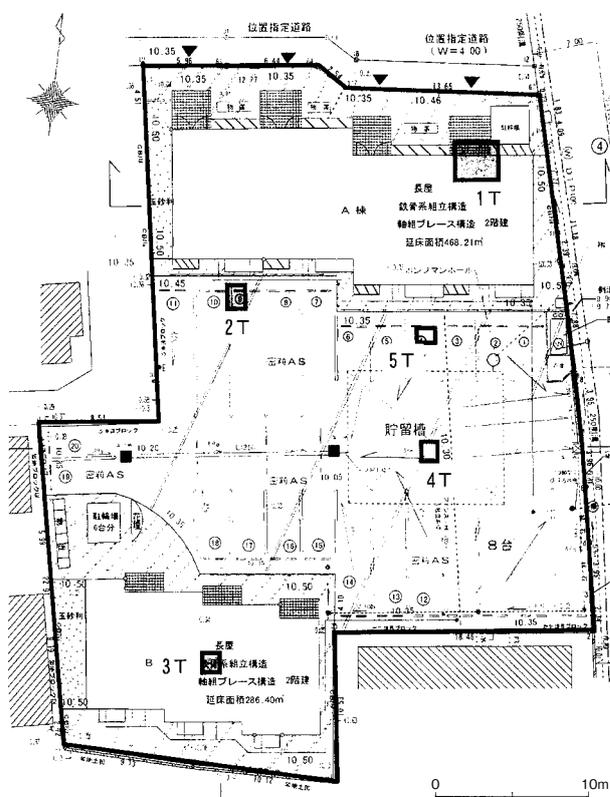


図2 トレンチ位置図 (1/500)

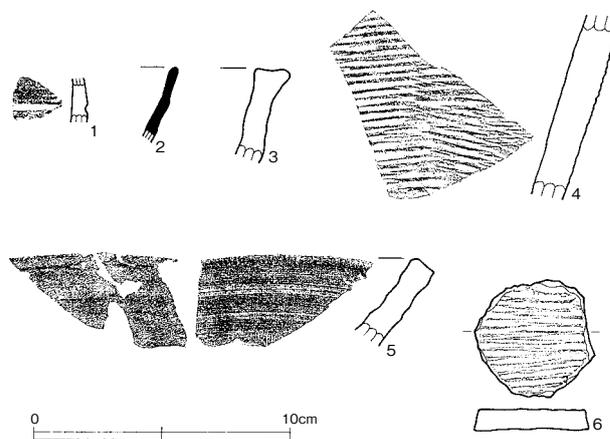


図3 遺物実測図 (1/3)

(6) 桜大門遺跡 第4次調査 (2013134)

所在地 新潟市秋葉区西島字大和167番地外
 調査の原因 農業用倉庫建設 (民間事業)
 調査期間 平成25年7月22日 (1日間)
 調査面積 9.16㎡ (調査対象面積228.09㎡)
 調査担当 朝岡政康
 処置 工事立会

調査に至る経緯 農業用倉庫建設に伴い、平成25年6月21日に『文化財保護法』第93条の届出が出された。取扱いを決めるために、平成25年7月16日付新歴B第53号の3で着手報告を提出し、確認調査を実施した。

位置と環境 桜大門遺跡は新津丘陵西側の北西方向に伸びた丘陵先端部に位置し、調査箇所は西側には沖積地が広がっている。遺跡は古くからある西島集落の中にあり、集落内にある連徳寺境内は中世の西島館跡に比定されている。調査地点の標高は約8.4mを測る。

調査成果 1か所のトレンチを設定した。丘陵上の遺跡のために堆積土は65cm程で厚くはないが、Ia・Ib層：盛土層、Ic・Id層：攪乱層、II層：暗褐色シルト層、III層：黄褐色シルト層 (丘陵の基盤層) に分層される。II層・III層間には攪乱層を挟む場所もある。

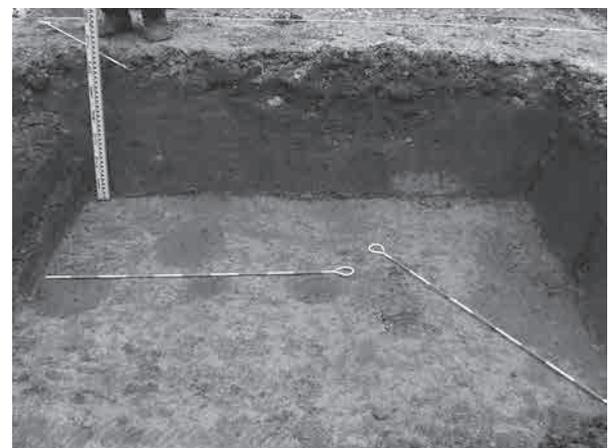
II層は、平安時代の可能性が高い遺構 (ピット：P1・P2) の覆土と類似する暗褐色シルト層であり、本来の遺物包含層の可能性が高いが、調査地点では攪乱によりほとんど遺存していなかった。

検出遺構 III層上面でピット5基と土坑2基が検出された。遺構は覆土により、①類：II層の暗褐色シルト層と同質のもの、②類：II層より上層の黒褐色シルト層と同質のものに2分類された。①類のP1・P2はII層と同質の暗褐色シルトが覆土となっており、平安時代の可能性が高いと考えられている。②類のP3～P5はいずれも黒褐色の覆土で、P3から近世以降の陶磁器が出土したことから、他の2基もこれと同時期の遺構と考えられている。検出された土坑2基も同類である。この黒色シルト層には近世陶磁器や現代遺物を混入し、III層を直線的に切っている部分も見られたことから、後世に改変を受けた土層と考えられている。また、平安時代の遺物もこの層から出土するが、II層を削平したことによる混入と考えられている。

出土遺物 I層盛土層や攪乱層から平安時代の須恵器・土師器、珠洲焼・近世陶磁器がコンテナケース1箱出土した。図化したものは須恵器大甕2点 (2・3)、珠洲焼の壺 (1) である。珠洲焼はIV期頃 [吉岡1994] か。この他に須恵器杯蓋、土師器椀・甕小破片がある。近世陶磁器は17～19世紀頃のもの。4は工事立会の際に



図1 調査位置図 (1/10,000)



北壁土層断面及び遺構確認状況 (南から)

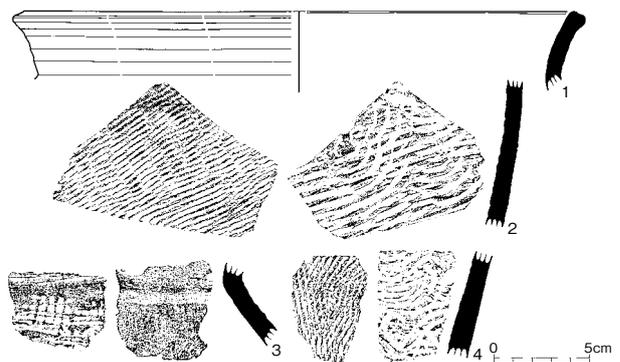


図2 遺物実測図 (1/4)

出土した須恵器大甕体部破片である。

まとめ 確認調査の結果、遺物包含層は攪乱を受けているが、遺構検出面は良好に遺存していることが判明した。農業用倉庫の基礎は盛土内に納まり、保護層も確保されることから工事立会に対応することとなった。

(渡邊朋和)

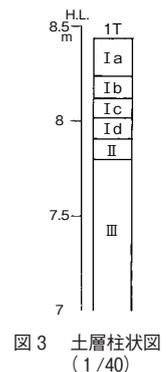


図3 土層柱状図 (1/40)

(7) 日水南遺跡 第6次調査 (2013142)

所在地 新潟市江南区日水一丁目481外

調査の原因 駐車場造成 (民間事業)

調査期間 平成25年6月17・18・20・21・24～26日
(7日間)

調査面積 14㎡ (調査対象面積2,500㎡)

調査担当 諫山えりか

処置 現状保存

調査に至る経緯 日水南遺跡は、平成24年度に寺院の駐車場造成に伴い、確認調査 (第5次・2012159) を実施した [金田2014]。その結果、掘削工事の際に工事立会を行うこととなり、調査範囲の西部に位置する小丘について現代の盛土と判断し工事立会を行った。この工事立会時に小石が多数確認されたが、この時点では遺物として認識しておらず工事立会後にこの小石が一石経ということが判明した。そのため、工事立会によって削平された小丘が経塚である可能性が推察された。以上の経緯を踏まえて、埋蔵文化財の状況を確認することを目的に、平成25年6月17日付で着手報告を提出し、追加の確認調査を実施した。その後、平成25年7月16日付で『文化財保護法』第93条の届出が提出された。

現状では工事に伴い、小丘の上部は削平されている。

位置と環境 日水南遺跡は新潟砂丘の新砂丘 I - 1 (亀田砂丘前列) の東側斜面に位置する。現地は標高約8mを測り、西から東に向かって傾斜しその比高差が約5mある。

これまでに複数回調査が行われており、第5次調査では、縄文・古墳・平安時代の遺物やそれらと同時代と考えられる遺構が確認されている [金田2014]。

また、同一砂丘列上に多くの遺跡が所在し、砂丘上を中心に人々が生活を営んでいたことが分かっている。

検出遺構 今回の調査では、経塚の可能性がある小丘があった地点に長さ南北約13m、東西約14m、幅約50～60cm程の2本のトレンチを十字に設定した。

基本層序は、I層：表土、IIa層：暗褐色砂層、IIb層：暗褐～黒褐色砂層、III層：褐色砂層、IV層：黄褐色砂層に分けられる。第5次調査の成果から、IIb層が縄文～平安時代の遺物包含層、IV層が遺構確認面となる。

遺構確認面であるIV層から土坑 (SK) が1基、時期不明のピット (P) 1基、性格不明遺構 (SX) 5基が確認されている。遺構は検出状況のみ記録した。土坑 (SK 2) は検出時点で縄文土器が確認できたことから、縄文時代と考えられる。

トレンチの十字に重なる位置より北西の地点で一石経が集中して確認された。この地点は小丘の中心部に近

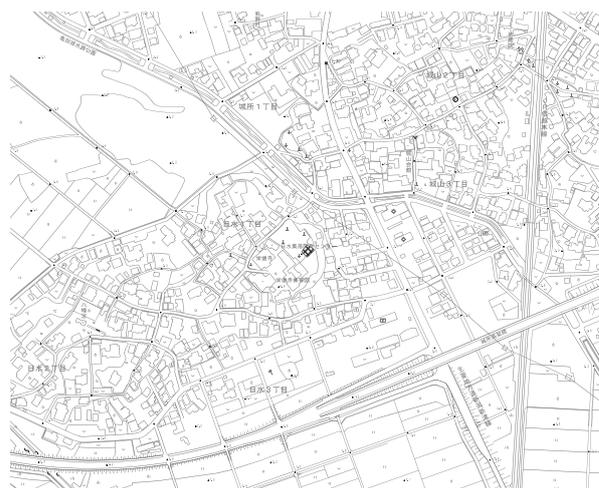


図1 調査位置図 (1/10,000)

く、一石経は遺物包含層であるIIb層を掘り込んだ地点に一括で出土した。このことから小丘は平安時代以前の遺物包含層を掘り込んで一石経を埋納した経塚と考えられる。SX 4・7・8は、経塚を構成するIIb層を切っている性格不明遺構及び落ち込みである。なかでも、SX 4はその上層にIIa層が存在しており、経塚と近い時期の遺構と推定できる。そのため、この3つの遺構が経塚の端部を形成するための遺構と考えられる。以上の結果と削平以前の地形図から経塚は一辺5～6mの方形と推定されており、高さは現存で0.9m程度となる。

出土遺物 今回の確認調査では、縄文土器・弥生時代から古墳時代にかけての土器・近世陶磁器・一石経が出土している。土器は、コンテナケース4箱程度である。うち、土器8点を図化した。一石経に対しては、赤外線撮影を行い文字の判読を行っている。また、一石経は今回の確認調査付近で行われた工事立会 (2013143) 時に採集されたものも含めている。

1はIIb層から出土した鉢の口縁部破片である。平口縁で、外面に斜行縄文が施されている。胎土には、繊維の混入が見られる。縄文時代前期前葉と考えられる。2はIIb層から出土した胴部破片である。細片のため器形不明である。外面に細く集合した沈線文が縦に施されている。南三十稲場式新段階と考えられ、縄文時代後期前葉と推定される。3はIIb層または攪乱から出土した深鉢の胴部破片である。外面に2条の沈線文が横位に施されており、それより下位に羽状縄文が施されている。縄文時代晩期前葉から中葉と考えられる。

4はSX 3の1層から出土した壺の口縁部破片である。内外面にミガキ調整・赤彩が施されている。5はIIb層から出土した壺の胴部破片である。外面にミガキ調整・赤彩が施されている。内面にはハケメ調整が施されている。6はIIb層から出土した小形の壺の口縁部破片であ

る。7は表土から出土した器台の破片である。内外面にミガキ調整・赤彩が施されている。4点とも弥生時代終末から古墳時代初頭にかけてと推測される。

8はⅡb層または攪乱から出土した備前磁器碗の口縁部破片である。二重網目模様の染付けが確認でき、18世紀ごろと考えられる。

先述の通り、経塚はすでに上部が削平されている状況であり、一石経はトレンチ内で一括して出土した資料以外にも、トレンチ内及び周囲で確認できる状況であった。それら全ての資料を合わせると、経石と考えられるものは328点であり、その内、墨痕が確認できるものは182点となる。さらに、文字が判読または推定できるものは64点となっている。墨痕が確認できるものが全体の約60%、文字が判読できる資料にいたっては約20%である。また、一石経の調査事例では総数が1万点を超える事例が珍しくなく〔池田1999など〕、日水南遺跡においても出土状況を加味すれば、経塚造営時に埋納された一石経の数量はさらに多かったと推測できる。

出土した一石経は単語あたりの字数と書かれている面数から7つに分類できる(表1)。1字のみのものが一字一石経と呼ばれるものである。なかには、石の代わりに土器片を用いるものもあるが、2点のみのため意図的に用いたとは考えづら

表1 一石経分類表

分類	点数
片面1字	149
土器片面1字	2
両面1字	20
3面1字	3
片面2字	5
両面2字	1
黒塗り	2
合計	182

表2 日水南遺跡出土一石経文字一覧

1字						
右(2)	王(1)	過(1)	臥(1)	願(1)	議(1)	供(1)
行(1)	驅(1)	應(1)	五(1)	功(1)	劫(1)	業(1)
之(1)	今(1)	左(1)	又(1)	座(1)	齋(1)	薩(2)
三(1)	衆(1)	生(1)	諸(1)	身(1)	人(1)	是(3)
千(1)	善(2)	其(1)	草(1)	属(1)	陀(1)	大(2)
坏(1)	天(1)	當(5)	汝(1)	若(1)	念(2)	便(1)
福(1)	佛(1)	夜(1)	業(1)	有(3)	世(1)	

2字						
□以	海□	解□	□之	南無	衆生	百十

※□は、不明文字である。不確定の字も含まれる。
※字横の括弧は、確認数であり、2字は1つしか確認されなかった省略している。



主要一石経 (右下 越前焼の可能性ある土器片)

い。細片のため詳細は不明だが、1つは近世の越前焼の可能性が考えられる。また、複数面に書かれているものも存在する。一方で、小数であるが2字書かれているものがある。これは多字一石経と呼ばれるものである。多字一石経にも複数面に書かれているものも存在する。また、墨書ではなく全面黒塗りのものが2点確認できる。

表2が判読できる文字の一覧である。一石経に書かれている内容は、主に経典を書き写したものと経塚造営に係わるものと考えられている。特に一字一石経は経典を書き写していると考えられ、なかでも『法華経』が書き写されている事例が多く報告されている。日水南遺跡においても判読できる文字の内、1字のものは全て『法華三部経』内で確認できる文字である。しかし、その他の経典においても確認できる可能性がある。また、2字のものは「衆生」など仏教に係わる単語であるが、経典内の文字かは不明である。さらに、複数面に文字が書かれているものについては、他の事例では書き損じによる書き直しなどが指摘されているが〔水野ほか1985〕、日水南遺跡では全く別の字が書かれているため、書き直しの可能性は低く複数面に書かれた理由は不明である。

まとめ 一石経の経塚は中世から確認され、近世に全国的に普及する。土器片を用いた一石経の土器片が近世の越前焼の可能性のあることから、日水南遺跡の経塚は近世に造営されたと考えられる。

また、経塚は寺院敷地内にある。この寺院の開基については諸説あり、詳細は不明である。しかし、この寺院は曹洞宗であり、寺院で読まれる『法華経』の「観世音菩薩普門品第二十五」では、一石経で確認された文字48字の内7字確認できない。そのため、寺院とは直接の関係が無い可能性もある。しかし、地域の歴史を考える上で重要な資料であることには間違いない。

経塚以外にも、経塚の下層からは縄文時代の土坑を含む遺構が数基確認されている。遺物は縄文土器や弥生時代終末から古墳時代初頭に掛けての土器などこれまでの調査成果とも一致している。特に、今回は縄文時代前期前葉の土器が確認されたことも注目される。

取扱いについては、今回の確認範囲は工事による掘削を行わない予定のため、土嚢を入れて埋め戻し、現状保存としている。

今回の確認調査にあたり、新潟県教育庁文化行政課滝沢規朗氏、柏崎市教育委員会伊藤啓雄氏に現地にてご指導いただいた。一石経の判読について帝京大学相澤央氏、経典及び寺院の来歴等について栄徳寺茅原雅道氏にご教示いただいた。(金田拓也)

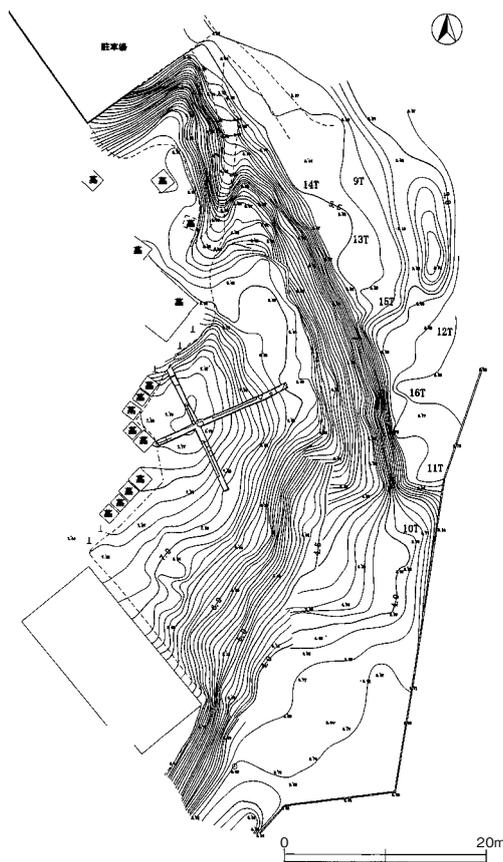


図2 トレンチ位置図 (1/750)

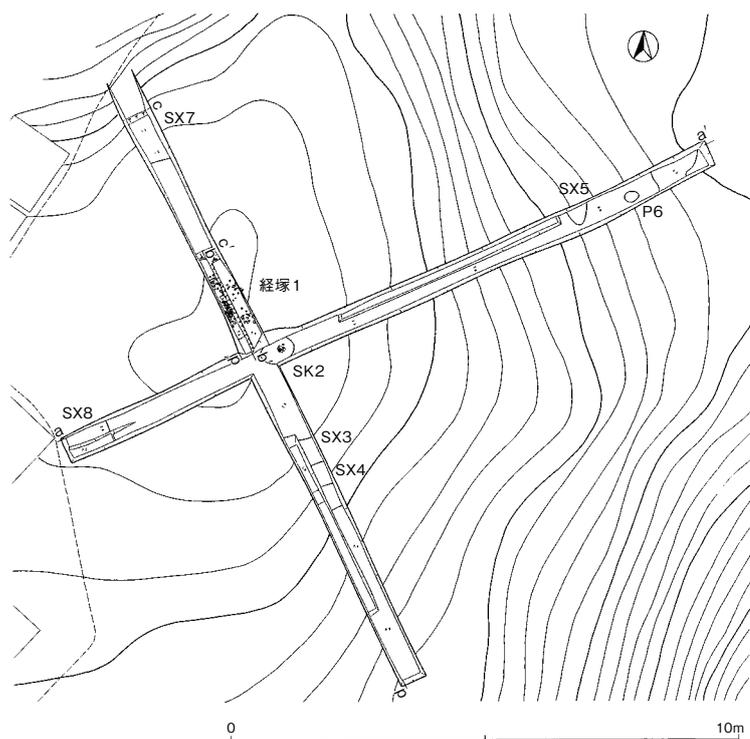
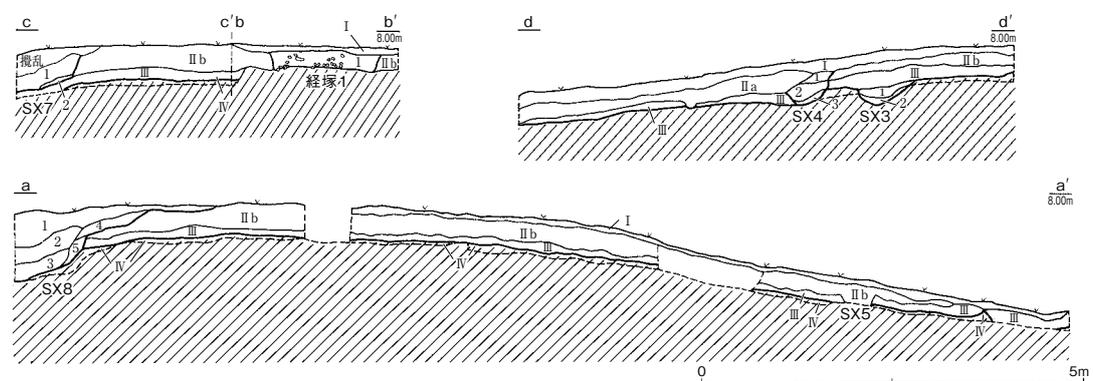


図3 調査区平面図 (1/150)



基本層序	経塚1	SX3	SX4	SX7	SX8
I層 表土	1層 暗褐～黒褐色砂 しまりあり。 IIb層類似。	1層 暗褐色砂	1層 暗褐色砂 IIa層類似。	1層 暗褐色砂 しまりややあり。	1層 暗褐色砂 根多く混じる。
IIa層 暗褐色砂 しまり弱い IIb層より明るい。		2層 褐色砂	2層 黒色砂 粘性ややあり。	2層 褐色砂 2層混じる。	2層 黒褐色砂
IIb層 暗褐～黒褐色砂 しまりあり。(遺物包含層)			3層 褐色砂		3層 黒褐色砂
III層 褐色砂 黄褐色・黒褐色砂混じる。					4層 暗褐色砂 細砂混じる。
IV層 黄褐色砂 (遺構確認面)					5層 褐色砂

図4 調査区断面図 (1/100)

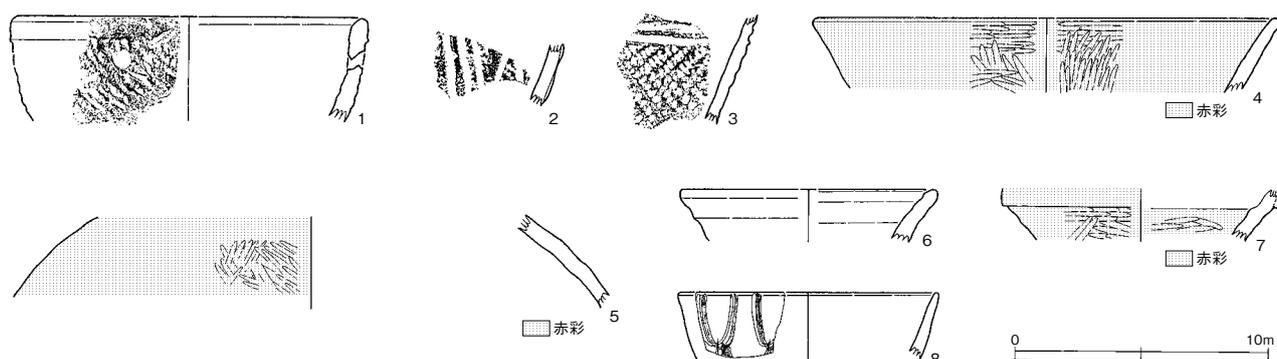


図5 遺物実測図 (1/3)

(8) 塩辛遺跡 第7次調査 (2013155)

所在地 新潟市秋葉区朝日112番6
 調査の原因 個人住宅建設 (民間事業)
 調査期間 平成25年9月6日 (1日間)
 調査面積 3.64㎡ (調査対象面積335.74㎡)
 調査担当 朝岡政康
 処置 慎重工事

調査に至る経緯 個人住宅建て替えに伴い遺跡の広がりを確認するため平成25年9月4日付新歴B第66号の2で着手報告を提出し、確認調査を実施した。その結果、平成26年4月8日付で『文化財保護法』第93条の届出が提出された。

位置と環境 塩辛遺跡は、古津駅東側に位置し、現在の東大通川の南側、東西約250m、南北約150mの範囲に広がる。新津丘陵北西に隣接する微高地で、丘陵末端から沖積地にかけて広がる扇状地に立地する。付近では第二次世界大戦後に水田が埋め立てられ、宅地造成が進んでいる。調査地点の現在の標高は約7.8mである。

塩辛遺跡では、これまでも試掘・確認調査や下水道工事等に伴う工事立会で、弥生時代中期末・古墳時代中期末～後期初頭・飛鳥時代・奈良・平安時代の遺物が検出されている。古墳時代と奈良・平安時代の遺物が間層(砂層)を挟んで積層しており、洪水等に見舞われながらも、断続的に集落が営まれたものと推察される。隣接する台地や沖積地にも遺跡が広範囲に分布し、塩辛遺跡の西側には古津八幡山古墳との関連が指摘されている大規模な舟戸遺跡があるが、時代によって居住域を移動した同一遺跡になる可能性が高い。

調査成果 調査時には古い建物が残されていたために、宅地内の庭に1か所のトレンチしか設定することができず、遺構は検出されなかった。

層序は図2に示したが、115cm程の盛土層 (Ia・Ib・Ic層)があり、その下層を75cm程調査している。調査成果によれば、Ⅲ層とⅧ層が砂層で他は粘質土層。Ⅱ層とⅥ層から遺物が出土している。盛土直下のⅡ層から遺物が出土しているが、この層が本来の表土ではなく、盛土をする前に、元来の表土である水田耕作土を掘削した後に盛土を行ったことに起因するものと推測される。

出土遺物 1はⅡ層、2はⅣ層出土である。1は基部を欠損する羽口先端部。全周の1/4程が残っており、現存長6cm、推定外径5cm、内径1.7cm程度を測る。先端部は緑灰色に溶解し、滓に垂れ下がったと思われる部分が破面となっている。直径0.5～4mm程度の砂粒を含む硬質な胎土で、長石粒を多く含む。鍛冶用の羽口であろう。2は外面に附加条第1種RL+Rを斜位に施文

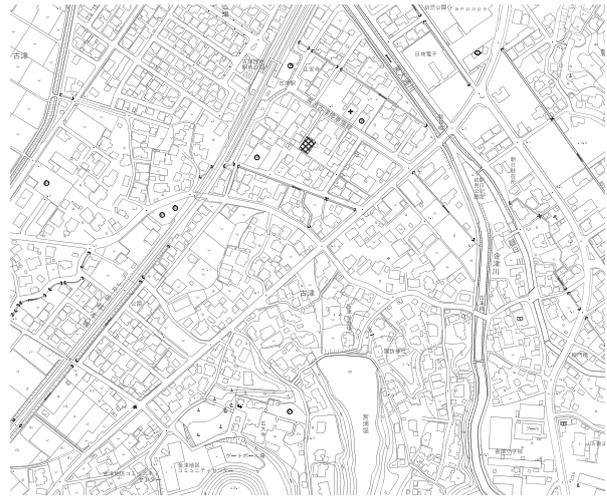


図1 調査位置図 (1/10,000)



塩辛遺跡周辺 (米軍撮影)



北壁土層断面 (南から)

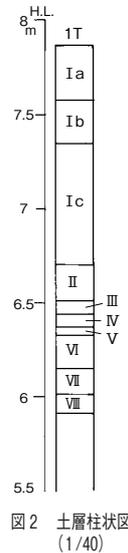


図2 土層柱状図 (1/40)

し、条を縦走させる。弥生時代後期の天王山式系土器で、古津八幡山遺跡に多くあり、隣接する舟戸遺跡からも出土している。この他に小片の為に図示していないが、1と共に出土した土器片が1点ある。内外面磨耗した小片で、砂粒の少ない胎土は古墳時代の土師器の可能性が高い。

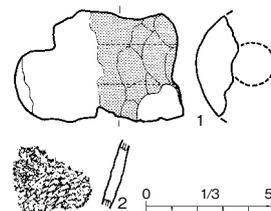


図3 遺物実測図 (1/3)

(渡邊朋和)

(9) 前山遺跡 第7次調査 (2013162)

所在地 新潟市江南区北山字前山264番外

調査の原因 共同住宅建設 (民間事業)

調査期間 平成25年10月8・9日 (2日間)

調査面積 42㎡ (調査対象面積986㎡)

調査担当 諫山えりか

処置 工事立会

調査に至る経緯 前山遺跡は、昭和42 (1967) 年頃の土取り工事によって広範囲に包含層が削平された。その後、昭和61 (1986) 年に包含層等の状況確認のため、発掘調査 (第1次・1985105) が行われ、一部の範囲で遺物包含層及び遺構の残存が確認された [酒井1987]。

共同住宅建設に伴い平成25年9月27日付で調査の依頼及び工事の届出が提出された。これを受けて平成25年10月1日付で報告し、確認調査 (第7次調査) を実施した。

位置と環境 前山遺跡は、新潟砂丘で最も内陸側の亀田砂丘 (新砂丘 I - 3) の南西斜面に立地する。現況の標高は約34mで、周囲は畑地となっている。

これまでの調査によって、主に古代 (奈良・平安時代) の土師器・須恵器等が確認されている。

同じ砂丘列南斜面周辺には金塚山遺跡・彦七山遺跡が並列するように所在し、両遺跡からも古代の土師器・須恵器などが確認されている。

検出遺構 基本層序は I ~ VI 層に分かれる。I 層：盛土、II 層：灰褐色～黄褐色砂混じり粘土、III 層：シルト混じり粘土であり、遺物包含層は II 層である。3 T では遺物包含層は確認されなかった。明確な遺構は確認されなかったが、3 T では遺構の可能性のある落ち込みが III 層上面で認められた。落ち込み内からは土器 (3) が出土した。

出土遺物 土師器と石製品がコンテナケースで2箱分出土した。掲載遺物は、1・2が2 T の II a 層、3が3 T の落ち込み内、4が4 T の Id 層、5が1 T I 層からの出土である。

1は高杯で、杯部は内湾しながら立ちあがる半球状の体部に短く外反する口縁端部が付く。脚部は短い中実脚で、脚裾部に向かって内湾気味にのびる。裾部との境界付近には段状の括れが巡る。杯部内外面および脚部外面はヘラミガキ調整である。

2・3は壺または甕の底部である。3は外面に指頭圧痕が観察される。

4は甕の口縁部である。外反する口縁部で、端部を丸く収める。内外面ともにハケメ調整が認められる。

5は敲石・磨石状石製品である。円形でやや平べったい形態をなす。石材は凝灰岩である。

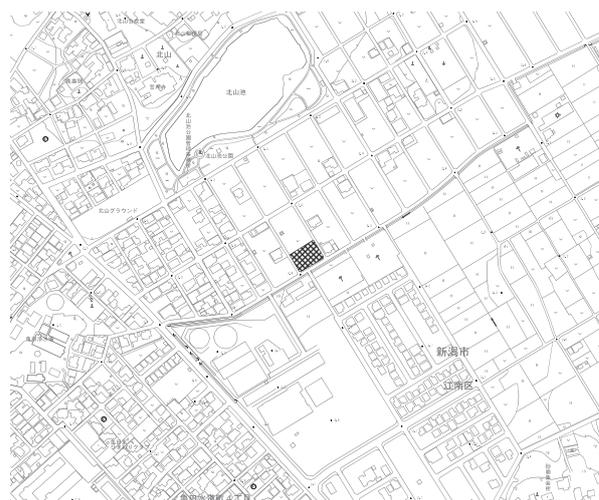


図1 調査位置図 (1/10,000)



調査風景 (3 T)



実測遺物写真

まとめ 1は形態や法量等から春日編年のII期 (7世紀) を中心とする時期が推測される。

取扱いについては、表土のすきとり及び側溝掘削時に工事立会を行った。遺構・遺物とも確認されなかった。

(相田泰臣・金田拓也)

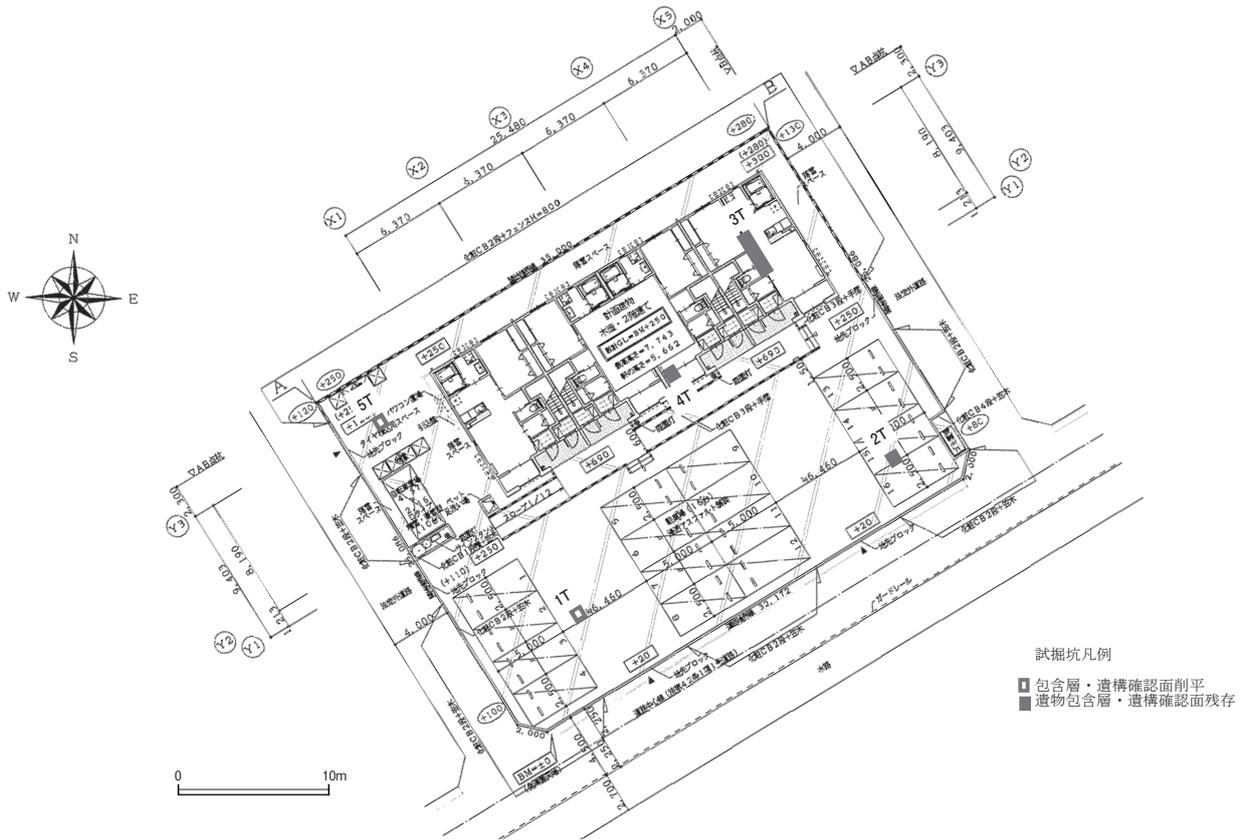


図2 トレンチ位置図 (1/500)

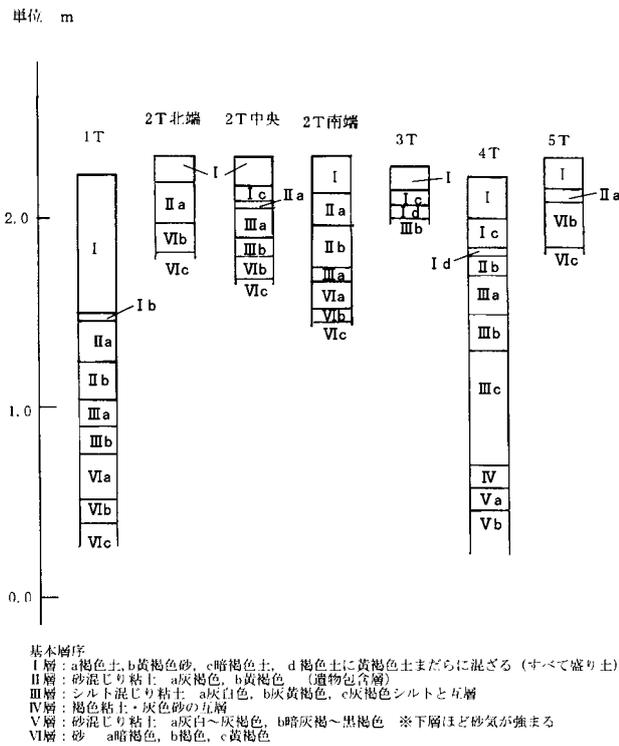


図3 基本層序 (1/40)

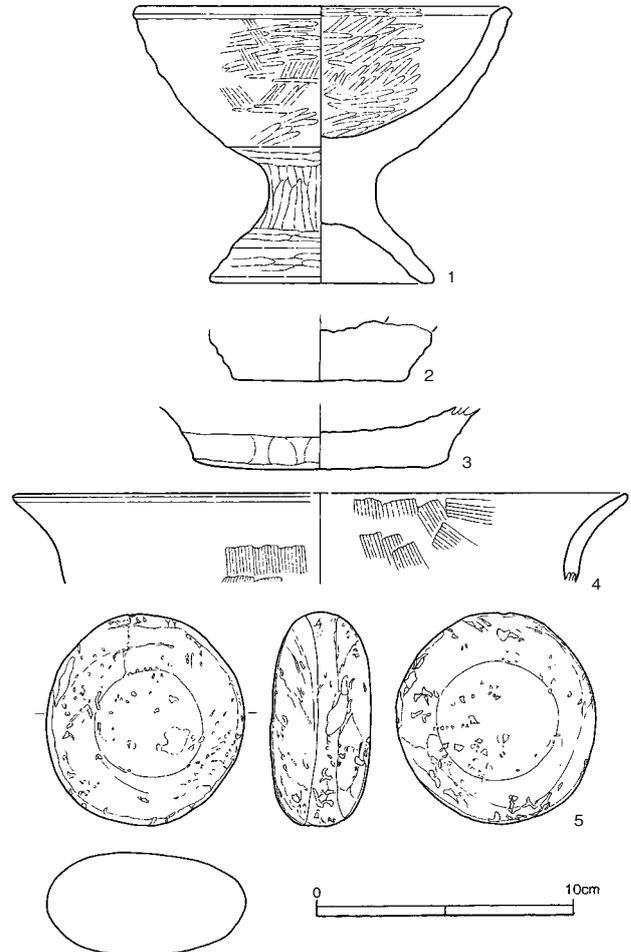


図4 遺物実測図 (1/3)

(10) 前田遺跡 第11次調査 (2013215)

所在地 新潟市西区山崎1044番地外

調査の原因 個人住宅建設 (民間事業)

調査期間 平成26年2月21日 (1日間)

調査面積 15.4㎡ (調査対象面積234㎡)

調査担当 朝岡政康

処置 慎重工事

調査に至る経緯 遺跡隣接地で計画された個人住宅建設に伴い、埋蔵文化財の取扱いを決めるために、平成26年2月19日付新歴B第223号の2で着手報告を提出し、確認調査を実施した。調査により遺跡の広がり確認されたために『文化財保護法』第93条の届出が3月18日に提出された。

位置と環境 前田遺跡は新砂丘Ⅱ-a列の南斜面に立地し、東西700m、南北20m程の範囲に細長く広がる。佐潟・御手洗潟の砂丘列の延長上に位置し、周囲の砂丘上には縄文時代から中世にかけての遺跡が多数分布する。

調査地点は遺跡の南西端にあたり、南側には砂丘間低地が広がる。調査地点の標高は4.5~4.8mを測る。

これまでも昭和63 (1988) 年に確認調査〔藤塚1989〕、平成11年に本発掘調査 (第5次調査)〔廣野2000〕が行われ、弥生時代中期後葉・飛鳥~平安時代・中世にかけての遺物が出土している。第5次調査は、砂丘南端に沿って設けられた用排水路の改修に伴い全長500mにわたって行われたもので、弥生土器が調査区南側 (報告書記載のX区) で検出されている。

調査成果 トレンチを2か所設定したが、遺存状況の良い1Tの層序を図示する (図3)。層序は、I層：盛砂層、II層：黄灰色砂層、III層：浅黄色粘土層に黒色砂がブロック状に混入、IV層：黒色砂層 (遺物包含層)、V層：黒色~暗褐色砂層、VI層：暗灰黄色~黄灰色砂層 (砂丘基盤層) である。IV層から弥生土器がまとまって出土しており、遺物包含層として遺存状況も良好であった。第5次調査のVI層に対応するものと考えられる。遺構は、1Tで溝状遺構が検出されたが、III層を切って構築されており、近現代の遺構と考えられている。

出土遺物 弥生土器を3点図示した (図2)。いずれも1トレンチIV層出土である。1は甕で、内湾状の口縁部から体部上半にかけての破片。細かいハケメ調整後、口縁部はナデ、頸部には横位に櫛描直線文を3条入れるが、擬似簾状文となる止めが2か所ある。内面はハケメ調整後、口縁部ヨコナデ、体部ナデ調整である。色調は橙色で1mm以下の長石を含む。2は頸部に櫛描直線文を3条入れる壺。1同様止めが2か所ある。外面はハケメ、内面はハケメ調整後ナデ調整。色調は淡褐色で、胎土は1に似る。3は底部で、外面はハケメ後ナデ、内面はナ



図1 調査位置図 (1/10,000)



1T北壁土層断面 (南から)

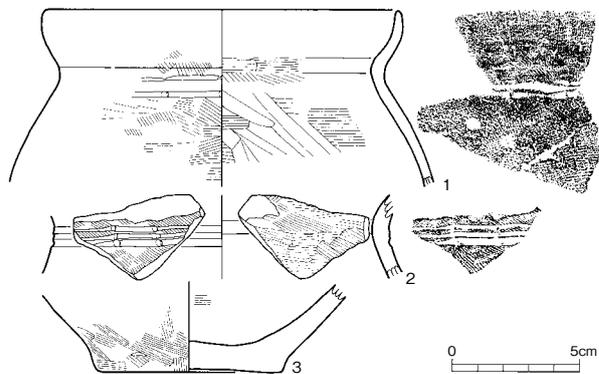


図2 遺物実測図 (1/3)

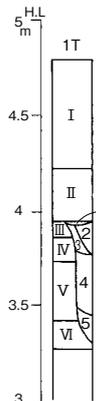


図3 土層柱状図 (1/40)

デ調整。色調は淡褐色で、1・2に比べ1・2mm程度の砂粒を多く含む。1・2は口縁部形態や擬似簾状文から中部高地の弥生時代中期末~後期初頭の頃のもの、3は同時期の北陸系土器であろう。

まとめ 確認調査では弥生土器しか出土しておらず、第5次調査結果に近い。前田遺跡の中でも弥生時代の中心域が南側にあることを示している。

(渡邊朋和)

(11) 近世新潟町跡 試掘・確認調査及び工事立会

(a) 近世新潟町跡の概要

新潟町は日本海有数の湊町であった。古新潟町と呼ばれる場所から明暦元（1655）年に現在の信濃川左岸の河口付近へ移転し、その後拡大しながら現在の新潟市市街地となった。この明暦元年に移転してからの江戸時代の町を「近世新潟町跡」としている。絵図や地子帳等の史料から、江戸時代の町割りが現在の区画に残っていると考えられており、北は烏帽子町、東は上大川前通、南は白山公園、西は寺町裏通を端とした南北約2.2km、東西約1.1kmと推定されている（〔渡邊2014〕図1参照）。

(b) 周知化と取扱い

近世新潟町跡の周知化について検討されたのは平成16年度に遡る。本市は平成16年7月に県教委によって実施された国道7号線万代橋下流事業に伴う試掘調査の結果を受け、周知化について検討を重ねた。近世遺跡は文化庁の通知により、「地域において必要なものを対象とすることができる」とされ、近世新潟町跡は江戸時代から現在の市街地へと区画などの町並みが連綿と続いており、まさに地域においてその重要性が認識されるものであった。しかし、都市化が進む軟弱地盤地帯での遺跡の遺存状況が不明であること、市街地での大小多くの開発に対して保護体制が十分でないこと等から、遺跡推定範囲内の試掘調査によって江戸時代と考えられる遺物包含層又は遺構が確認された地点について周知化を行うこととしている。平成25年度末で周知化された地点は12か所である。

(c) 平成25年度の試掘・確認調査

平成25年度に実施された試掘・確認調査は、公共事業に伴うものが2件、民間事業に伴うものが1件である。このうち、江戸時代の遺物包含層が確認されたのは1件であり、周知化を行った。以下、周知化を行った地点及び周知化は行っていないが出土遺物が江戸時代の遺物として高く評価できる地点の2調査について記す。

(d) 東堀前通6番町1061番地外地点試掘調査(2013131)

(図2・4)

所在地 新潟市中央区東堀前通6番町
調査の原因 駐輪場建設（公共事業）
調査期間 平成25年8月7日
調査面積 18㎡（1T：9㎡、2T：9㎡）
調査担当 朝岡政康
処置 慎重工事

調査概要 調査地はコンクリート舗装された駐車場であり、トレンチを2か所設定した。コンクリート舗装は厚く、0.2~0.4mほどあり、さらに下地に人頭大の川原

石が敷き詰められていた。近代のコンクリート舗装と盛土は1Tで1.3~1.4mに及ぶ。地表下約1.6~2.3m（IV層）で江戸時代の遺物包含層（18世紀半ば~後半）が確認された。また、VI層からは、砂目痕の残る磁器皿や刷毛目の大皿など17世紀代の肥前陶磁器が出土している。両トレンチとも崩落が激しく、遺構の確認はできなかった。

天保14（1843）年の新潟町地子帳によれば調査地は加賀屋倉右衛門となっており、通し屋敷で本町につながっているが、規模やどのような店であったかは不明である。

当該地は17~18世紀代の遺物包含層が残っていることが確認されたことから、近世新潟町跡の範囲として周知化した（平成25年12月26日付）。工事による掘削深度が1.0m以内にとどまることから、慎重工事で対応した。

(e) 古町通5番町622外地点試掘調査(2013195)(図3・5)

所在地 新潟市中央区古町通5番町622外
調査の原因 駐輪場建設（公共事業）
調査期間 平成25年12月25日
調査面積 約15㎡
調査担当 朝岡政康
処置 慎重工事

調査概要 調査地は店舗撤去後の更地で、トレンチを2か所設定した。トレンチはいずれも崩落が著しく、1.5~2.0mの掘削が限界であった。表土下のII層からは埋甕が1個体見つかった。19世紀の肥前大甕（ハンズー甕）とみられる。またトレンチは計4か所の焼土・焼礫を廃棄した土坑によって大きく攪乱を受けていた。I層直下の焼土・焼礫土坑は機械掘削によるものと考えられる。遺物は全てこの焼土・焼礫の攪乱土坑から出土した。遺物の年代は18世紀の肥前系陶磁器が主体であるが、焼土・焼礫3では17世紀末の肥前磁器皿も確認されている。

調査の結果、17世紀末から18世紀にかけての遺物が出土しているが、大規模な掘削により江戸時代の遺構及び遺物包含層が残っていないと判断し周知化はしなかった。

(f) 平成25年度の工事立会

平成25年度に行った遺跡範囲内の工事立会件数は8件である。その全てが国道7号線万代橋下流事業に伴うものである。工事の多くの場所が重複しているため、本稿では国道7号線万代橋下流事業の範囲を示す。（図6）

全ての工事区間において地表下1m前後までが近・現代の盛土であり、その下に江戸時代の粘質シルト土層が存在する。しかし、工事掘削深度が1.2~1.6mの範囲であるため、安定した江戸時代の遺物包含層までは達していない。それでも、出土遺物は江戸時代の陶磁器を中心にコンテナケースに17箱分になった。



図1 調査位置図 (1/10,000)

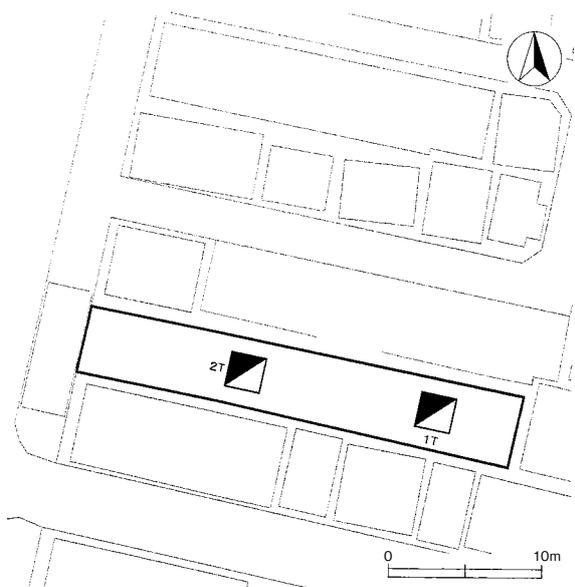


図2 トレンチ位置図 (1/500) 2013131

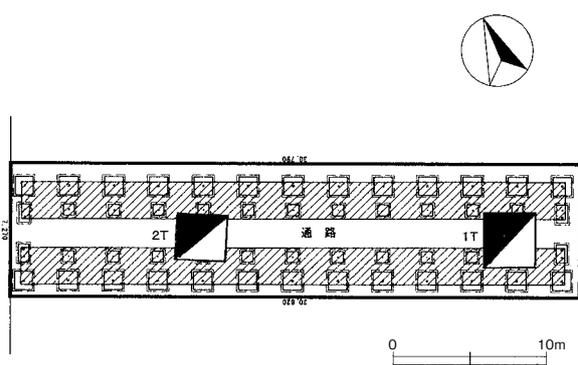


図3 トレンチ位置図 (1/500) 2013195

平面図凡例

	調査対象範囲
	遺物出土トレンチ

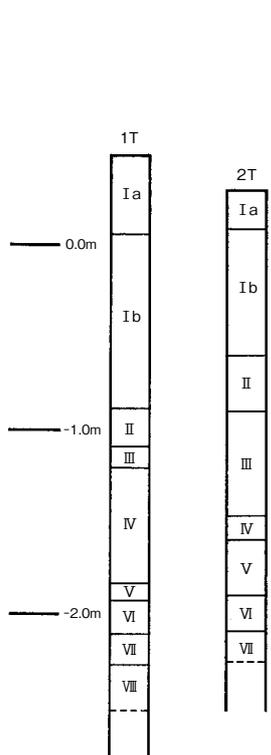
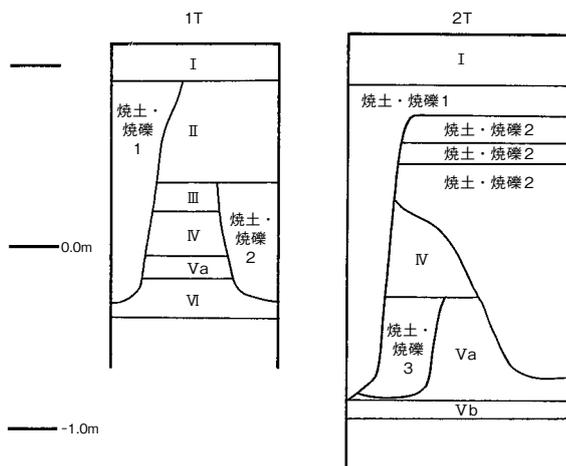


図4 土層柱状図 (1/40) 2013131

- 2013131
- I層: a アスファルト舗装、b 盛土
 - II層: 黄褐色シルト
 - III層: 青灰～黄褐色シルト
 - IV層: 灰色砂、粘性・しまり無
 - V層: 灰黄褐色シルト、2Tでは黄色粘性強
 - VI層: 灰～黒褐色砂、17世紀代の遺物出土
 - VII層: 黒褐色シルト、炭化物を多く混じる、木くず多い
 - VIII層: 暗灰～青杯砂、湧水



- 2013195
- I層: 表土、砂利など
 - II層: にぶい黄色土、人頭大の礫多量に入る、埋甕あり
 - III層: オリーブ褐色土、撤入土の可能性が高い
 - IV層: 黄褐色シルト、焼土粒混入
 - V層: a 灰色シルト、b 灰色砂
 - VI層: 橙色シルト

図5 土層柱状図 (1/40) 2013195



試掘調査地近景 (2013131)



1 T東壁断面 (2013131)



2 T東壁断面 (2013131)



試掘調査地近景 (2013195)

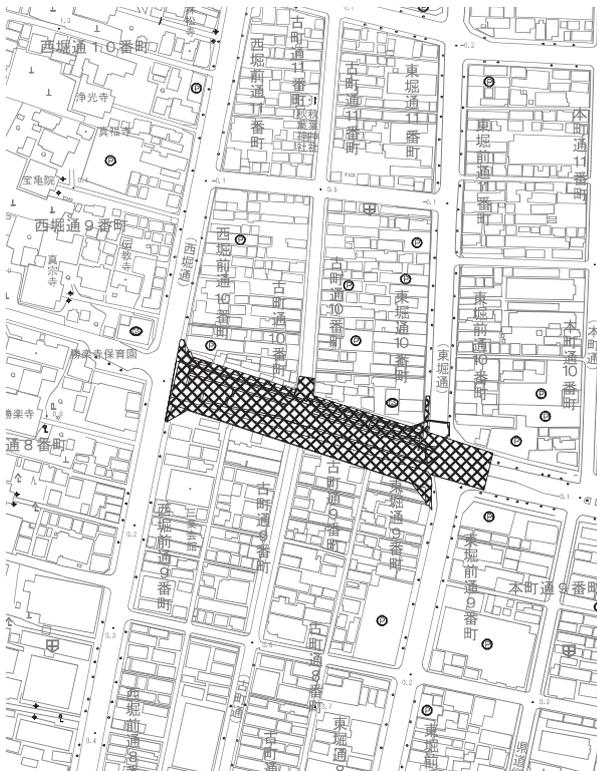


図6 平成25年度工事立会範囲 (1/5,000)



2 T北壁断面 (2013195)



工事立会土層断面 (2013277)

(g) 出土遺物

近世新潟町跡はこれまでの調査において、1) 移転(1655年)以前の初期伊万里が一定量出土する。2) 幕末まで肥前産の陶磁器が主体を占める。3) 高級品・上質品が出土する。等の特徴が報告されている。〔渡邊2014〕

平成25年度においては、2)の肥前産陶磁器が主体を占めるという点は合致したが、3)の高級品・上質品については、小皿等で薄手の上質品が見られるものの、平成24年度出土のような芙蓉手や口径40cmを超える大皿は出土しておらず、1)の初期伊万里についても出土しなかった。

出土品の年代は、17世紀後半から18世紀後半にかけてのものが多く、特に18世紀半ば以降のものが目立った。

これは、平成25年度の調査において、崩落と湧水により江戸時代後期の層までしか調査できなかったことと、工事立会では、掘削が1.2~1.6mに留まることに起因するものであり、当該場所に移転時の遺構が残らないということにはならないので、今後も注意が必要である。

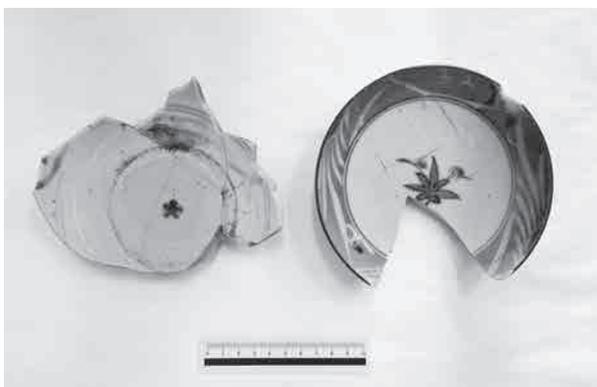
また、2013195調査地点においては、焼土・焼礫土坑がみつき、出土品においても二次被熱を受けているものが見受けられるため、付近で火事がありそれを当該地に廃棄したことが窺われる。(今井さやか)



肥前磁器皿 (17世紀後半~18世紀前半) 2013131



肥前陶器・火入れ (17世紀後半~18世紀) 2013131



肥前磁器皿 (17世紀末~18世紀前半) 2013195



肥前磁器蓋付鉢、二次被熱 (18世紀) 2013195



肥前磁器鉢 (18世紀) 内面 2013277



肥前磁器鉢 (18世紀) 外面 2013277